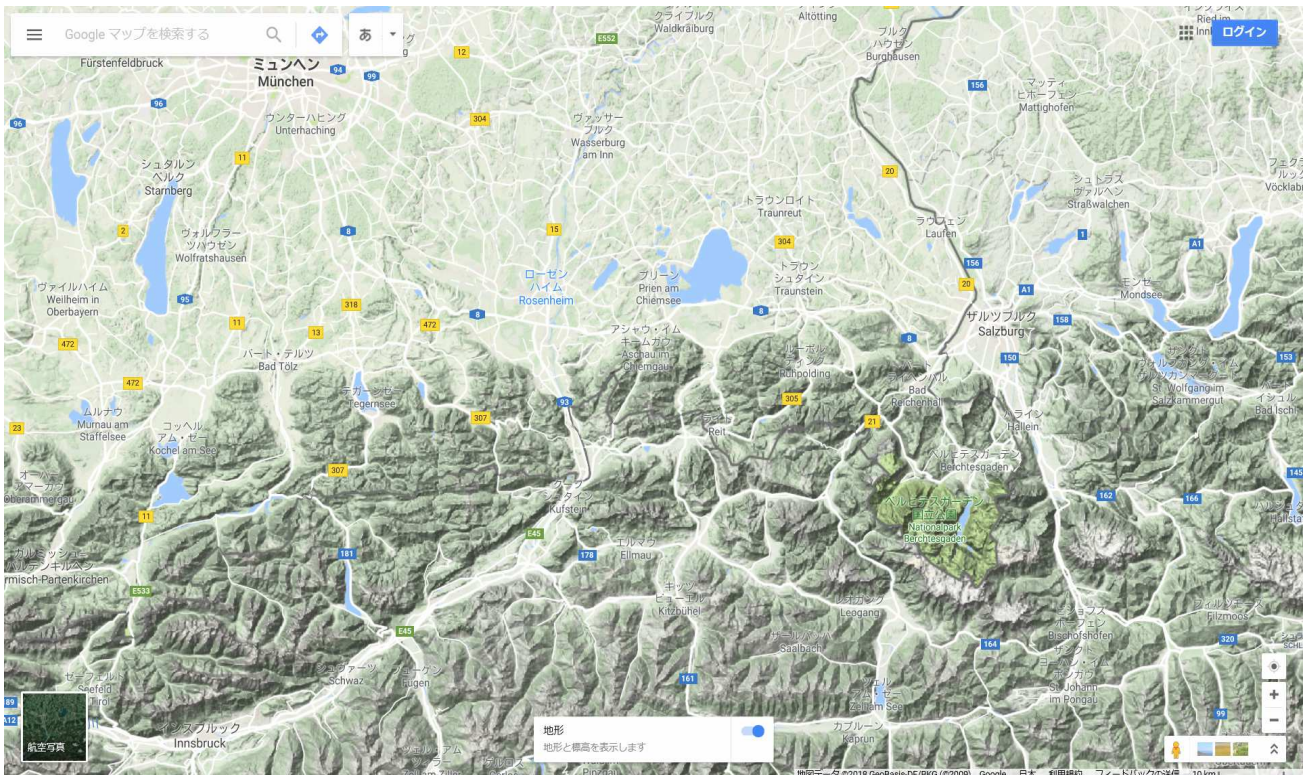


ツェル=アム=ゼー Zell am See

オーストリア共和国ザルツブルク州 人口 9,500 人



地図 左上にミュンヘン。中央右下のガルーンの上にツェル=アム=ゼー。右側中央にザルツブルク。黒い太線は国境を示す。

1985年8月、私は8年ぶりに欧州を旅していた。ユーレイル・パスを使い、鉄路を行く旅だった。スイスのチューリヒから始まり、月末にドイツのフランクフルトで終わる3週間ほどの旅程だった。スイスから始めたものの、旅の前半は北フランスから北ドイツにかけての都市を訪ね、平地の移動が多かった。

チロル地方を經由する

8月17日の日曜の朝は、南ドイツのアウクスブルクで迎え、宿から近いドーム(大聖堂)を見学する際、その礼拝に重なったことを覚えている。次に目ざすのは、オーストリアの都ウィーン(Wien)だったが、その途中でどこか一泊と考えていた。列車の旅は、車窓を眺めるのが楽しみだが、平地の風景ばかり見たせいか、立体としての山岳風景が見たくなった。ミュンヘンでオーストリア行きに乗り換える際、そのまま平坦な道でザルツブルク(Salzburg)へ行くのを

やめ、オーストリア西部のチロル(Tirol)地方へと向かうことにした。乗り込んだ列車は、その行き先がツェル=アム=ゼーと言うリゾート地を終着としていた。

DB(ドイツ国鉄)の中距離列車は、初め南ドイツの酪農地帯を南下する。車窓はどこまでも牧草地が続く。そして、ローゼンハイムという街を通過すると、南方にはチロルの山並みが見えて来た。この後、オーストリアのインスブルックから流れてくるイン川を遡って進む。その国境も近くなった。車内に乗り込んできた出入国管理官が、乗客にパスポートの提示を求めた。管理官は私の日本のパスポートに無関心で、ろくに見もせず返してきた。「世界一安全な国民」！ということなのか？

列車はいつの間にか国境を越え、クーフシュタイン、ヴェルグルと停車。ここから、チロルの山村に分け入り牧歌的な風景が続くローカル線となる。途端に列車の速度がゆっくりとな

った。そして、谷の蛇行に沿ってカーブの路を
行く。田舎の停車場ごとに止るのだが、周囲に
はしばしばスキーリフトの鉄塔が見られる。キ
ッツビューエルと呼ぶ有名なスキーリゾート
の前も通過した。冬場はここが一面の銀世界と
なり賑やかなのだろう、と想像した。夏の季節
は、それと比べて閑散としている。いつの間
にか車内には私一人しかいなくなった。午後
の陽を浴びて、チロルの谷は緑が眩しい。そ
して、日本の高原なら潤いがあるのだが、こ
こでは喉がかすれそうな乾いた、そして透
明な空気に満ちていた。

やがて列車は、アルペン的な風景はそのまま
に、チロルからザルツブルク州へと入る。北
のドイツ側に流れ下るザーラッハ川沿いの盆
地の街、ザールフェルデンに近づく。遠くに
ドイツ側のベルヒテスガーデンの山々が見
えて来た。この景色は感動的だった。山容
が白い石灰岩の塊からなっており、日本の
山に見られるような緑がない。その分威
圧的な印象を受けるが、一方で山岳の厳
しさを、崇高さといったものを感じない
わけには行かない。ちょうど傾いた午後
の陽が正面から当たっている時間だった。
そこを過ぎると終点のツェル=アム=ゼー
は間もなくだった。左の車窓にツェル湖
(Zeller see)が見えてくると、湖畔の
鉄路が湖側に大きくカーブして回り込
み、その向こうに駅舎が見えて来た。所
要3時間の列車の旅だった。

ツェル湖の畔にて

オーストリアの言葉(ドイツ語)でゼーは湖
をさす。ツェル湖は南北3.7km、東西1.7
km程の広さで、水深は深い所で68m。
街の名は、湖沿いにある場所と言った意
味になる。駅の陸側に街は広がる。直ぐ
に山が迫っているため、集落は湖沿いに
南北に長く、東西には狭い。駅を出た頃
には、山の天気なのか弱い雨が降ってお
り、空気もとても冷えていた。海拔750
mのこの地は、夏は避暑地として賑わっ
ている。旅の

途上、7月末のパリはとても暑く、夏に
来たありがたみをそれほど感じなかった。
しかし、こちらは高原とあってしかも雨
降り、肌寒い位だった。

小さな街なので宿探しも楽だった。街
の中心から少し入った所に、いかにもチ
ロル風の大屋根が、なだらかに傾斜する
3階建てのペンションがあった。その『
アンドレア(Andrea)』に入り交渉。と
ころが、今日初めて通貨オーストリア・
シリングを使う国に来たので、肝心の宿
代が高いのか安いのかで戸惑ってしまった。
宿のおばちゃんに「それが安いのか」?
と尋ねると、「安い!」との返事。それか
ら計算しなおすと、朝食付きで日本円に
して4,000円もしないことに気が付
き、「一泊よろしく」ということになっ
た。現金のみの前払いとなる段になり、
そのシリングがないことに気付く。やる
ことが後手だった。「両替所はどこにあ
るか?」と聞くと、銀行は閉まっている
ので、「グランド・ホテルに行つて」と
言われた。湖側に5分だと言う。部屋
に荷を置き外に出た。振り返ると、チ
ロルの民家風の建物。各窓にはフラワー
ボックスがあって、ゼラニウムの素直
な赤色が建物に華を添えていた。



小奇麗になった現在(2018年)のペンション アンドレア

小さな町のさらに小さな中心街を行く。
石畳を闊歩する観光客の足音と話声が響
いていた。さて湖に突き出たグランド・
ホテルの中に入る。白亜の大きな館は、
伝統と格式を感じさせるイ

ンテリアだった。フロントの女性は、さすがに宿のおばちゃんと違って、丁寧な対応をしてくれた。両替を待つ間に、新聞が並ぶ棚の目立つ所に Dagens Nyheter (ダーゲンス・ニテル) が置いてある。中身は読めないが、それがスウェーデンの新聞であることを知っていた。現金が渡される時、「なぜ、スウェーデンの新聞が置いてあるんですか？」と聞いてみた。曰く、「このホテルには、夏になると、北欧スウェーデンの金持ちが多く来られます」とのこと。今回の旅の初め、チューリヒで開催されていた、ノルウェイの美術展を見た。どうもこうした中欧の山国と北欧とは、ともに寒冷な地として共通したものをもっているのでは、と思ったりした。



湖に突き出たグランド・ホテル。背景にはベルヒテスガーデンの山々

湖畔に癒しを求めて

街中の食堂で夕食をとった後、湖沿いの公民館で「弦楽四重奏の夕べ」があると言うので、湖畔のプロムナードを歩き会場へと向かった。コンサート会場には、白色のスーツ姿の紳士がいかにも北欧風の顔立ちの金髪女性をエスコートしてやって来ていた。なるほど、グランドホテルにはこうした上流階級の紳士淑女が泊っているのかと、そう思った。演奏するのは壮年のグループだったが、名前は失念した。彼らの演奏するハイドンやモーツァルトの作品に、しばし耳を傾けた。それがはねた後、静かになった市街地を抜け宿に戻った。その夜は、外が

冷える分、暖かい毛布をかけてベッドにうずくまった。

翌朝も、天気はすっきりしなかった。ザルツブルク行きの列車には時間があつたので、あらためて湖畔のプロムナードを散策した。雨が上がっていたので、歩くのには困らなかった。しかし、未だ霧が残る湖面の向こうには、昨日見たベルヒテスガーデンの山々を見ることはできなかった。それでも、湖畔の散策は良い思い出になった。第一、湖沿いで道にはアップダウンがなく、楽に歩みを進めることができた。犬を連れた夫婦連れや杖を使ってゆっくり歩くご老人などに会った。このプロムナードの散歩は住民にとって、生活の一部になっている様だった。今から振り返ると、3週間の旅とは言え、あまりに訪問のメニューを詰め過ぎていた。そんな旅の途中で、目的もなくやって来たこの湖沿いの避暑地でのんびりと歩くのは、大変な癒しとなったのでは、と思う。

午前中の列車に乗り、この州の中心であるザルツブルクへと向かった。1時間半の旅だったが、駐車場も多く、もっと時間がかかったと感じた。ザルツブルクは、モーツァルト関連やミラベル庭園など見どころも多かったが、さほど大きくない街に観光客が押しかけていた。見学もそこそこに、午後の長距離列車で目的のヴィーンへと旅を進めた・・・。

それから、二十五年以上の時がたった。この間、ツェル=アム=ゼーの人口は2割近く増加したと言う。フェルディナンド=ボルシェの一家のように、第二の人生をここで過ごす人も増えたそうだ。そして押し寄せる観光客。砂漠の中東からの団体客は、一日に何度も雨が降るこの街で、彼らにとって「珍しい」雨を浴びて喜び、帰って行くのだそうだ。こう書いて原稿を止めにしておく8月11日、ネットでの情報だと、ツェル=アム=ゼーの気温は現地の午後で25度、そして天気は雨となっていた。